

令和2年度 事業報告書 (学園)

1 子どもの学習支援事業（鹿沼市委託事業）

(1)実施日及び場所

毎週土曜日：東部台コミュニティーセンター

毎週火曜日：南摩コミュニティーセンター

毎週水曜日：鹿沼市民情報センター

春休み：菊沢コミュニティーセンター

＜その他の活動場所＞

こども食堂 タケノコ（英語・数学）

こっとん村（家庭科）

森の小人（学習相談 不登校相談）

文化活動交流館ピュルテ（調理実習）

(2)内容

- 教科指導 芸術活動 コミュニケーション プログラミング教育 スポーツ教室
- 不登校相談等教育相談
- 保護者交流会
- 兄弟支援

(3)講師

教職員退職者、塾講師、大学生 その他 37名

(4)児童生徒利用者数

コミセン登録 97名

（こども食堂では希望者が随時参加）

(5)成果と課題

- 本年度は全体では登録者は減少したが、よりニーズのある家庭の相談や臨時対応が増えた。
- 昨年度と同じ場所で開催したので継続して児童生徒が参加し、講師の先生方との信頼関係ができ、学習効率が上がった。
- コロナ対策で休止した分の学習支援を春休みに行った。
- 保護者の希望により、小学校低学年から受け入れたので、定期的な学びの機会を得て、

学習習慣が身につき、落ち着いた生活が送れるようになった。

- ・2時間の学習への集中が難しい児童生徒が多くいたので小グループの芸術。スポーツ体験を取り入れた。
- ・本年度の個別面談は希望者のみ行った。虐待ケースなどの対応を子ども食堂、家庭相談員とともに行った。
- ・不登校対応、声優講座など、オンラインを使ったかかわりを工夫した。
- ・学習だけでなく、芸術家を招いた創作活動など楽しく学ぶ活動ができた。
- ・子ども食堂では、臨時の対応を行った。食を通じた親子支援、関係作りができた。

2 フリースクールでの学習指導

(1) 小中高校生3名

- ・フリースクール希望の児童生徒に、福祉サービスを紹介し、E p i c に在籍するケースが増えている。不登校という主訴から医療のかかわりを勧め、診断者を取って放課後ディーを使うという流れができている。
- ・医療的な対応を望まない児童生徒は、フリースクール在籍、経済的に困窮している家庭は学習支援事業の中で対応した。
- ・絵画教室のみ参加する小学生 1名

(2) 専攻科5名 (鹿沼市4名 群馬県1名)

- ・こっとん村で活動していた4名は、就労継続B型事業所へ移籍、うち1名はフリースクールと併用希望。
- ・教習所を卒業後、余暇支援を希望する青年1名は、ボランティア活動や地域の行事に参加。
- ・メンタルサポート3名
- ・ゴルフ教室 工芸 芸術活動などの生涯学習2名

(3) あおぞら学習支援6名 (運転免許取得)

- ・長期利用者 オンライン2名 対面4名、うち鹿沼に移住2名
- ・短期利用者 月平均3~4名
- ・一回 60分から90分の個別指導 (およそ45点を7回とれるようになるとつばさプランに入ることができる。)

(4) 成果と課題

- ・新しい交流場所ができたため活動が広がった。文化活動交流館では。画家、音楽家、菓子職人を招いた教室をひらき、専門的な体験が継続的にできるようになった。
- ・こっとん村から派生した新しい活動場所「ほわっと自然村」では、コンセプトの確認、環

境整備についての話し合いが行われた。来年度は春祭りや自由学校誘致の活動を展開する予定である。

3 多様性を認め合うまちづくり

（1）無量荘との連携

- ・デイサービス「和久井亭」でのお年寄りとの交流の充実
ボランティア活動 倉食交流 介護福祉体験
- ・福祉職員補助 有償ボランティア アルバイト雇用 正社員任用

（2）「生きいきこっとん村」事業の拡大とB型事業所への移行

- ・調理、手芸、文芸、農業等定期的な居場所活動（火・木10時～15時）
- ・ひきこもり支援アウトリーチ事業との連携
- ・綿製品の販売促進 カスマイムズ商品開発
- ・ほわっと自然村への移行準備

（3）こども食堂協議会

孤食防止 調理手伝いなど交流の場
困窮家庭からの緊急避難の居場所提供 宿泊支援
毎週月曜日：仁神堂 森のこびと
毎週水曜日：樅山 レストランノエル
隔週金曜日：タケノコ食堂
毎週土曜日：東部台こども食堂
毎月8のつく日：子ども食堂「ようき」
その他 鹿沼市内2か所開所

（4）こども未来（一社）との連携

子どもの居場所事業 表現活動 健康増進活動
文化活動交流館「カフェピュルテ」の開所準備
若者支援 不登校支援 高卒資格取得相談

（5）住居提供と生活支援

鹿沼市府中町123-3 第二藤ハイツ
現在3室がCCV利用者（1室はCCVが賃貸契約）
訪問、食事支援、余暇送迎等

（6）成果と課題

- ・新しい地域の居場所が 2 か所増えたので、若者の交流活動が活発になった。市外からの見学者が増えている。
- ・コロナ渦から、子ども若者の問題が深刻化、複雑化している。行政と連携を密にした地域の手によるトータルなサポート体制がさらに必要である。
- ・親支援のニーズが高まり、保護者の緊急避難の必要性もあり、子ども食堂が親子の居場所事業を担う必要性が出てきている。

5 各種講演活動

（1）発達障害者運転免許取得事業全国研修会

（2）全指連発達障害者教習支援指導者研修会

（3）鹿沼市学習支援研修会

（4）流山市親子劇場講演会

（5）成果と課題

コロナの勢いが収束せず、オンライン学習の必要性がますます高まっている。

逆にオンラインの日常化により、遠方でもつながりあえる利点もあり、新しい交流の形ができてきている。

今後は新しく増えた地域の居場所活動の発信をしながら「自由学校の誘致」などに向けての有識者等との話し合いを広げていきたい。